



アインシャムス大学

外国語学部

日本語学科

博士学位請求論文

意味論の観点から見るアラビア語から日本語への動詞文翻訳の問題点
—クルアーン・ユーセフ章の諸日訳を対象に—

研究者：アヤ・ワーエル

専攻：言語学

指導教授

カラム・ハリール・サーレム

ムハンマド・ラガブ・アル・ワゼィール

日本語日本文学学科教授

アラビア語学科教授

文学部

外国語学部

カイロ大学

アインシャムス大学

(2019 年)

目次

目次	2
図表目次	5
序論	7
問題意識と論文の目的	7
研究意義	7
研究方法	7
先行研究	9
論文の構成	11
第一章 理論の背景	12
1. 翻訳研究の分類	13
1.1. 翻訳研究の言語的アプローチ	14
1.1.1. 翻訳等価	14
1.1.2. シフトの概念	16
1.2. クルアーンの翻訳	18
1.2.1. 言語の階層とクルアーンの翻訳	19
1.2.2. 井筒・三田・中田の対訳を選んだ理由	22
1.2.3. ユースフ章を選んだ理由	22
2. 言語を意味を発生させる体系の見方 Halliday の選択体系機能理論	24
2.1. SFL の考案者と代表的な研究者	24
2.2. SFL 理論の概要	25
2.3. メタ機能	27
2.3.1. 観念構成的機能－過程構成（Transitivity）の選択体系網	27
2.3.2. 対人的機能－叙法の選択体系網－	28
2.3.3. テキスト形成的機能－主題選択体系網（テーマ・レーマ）	28
2.4. 他動性の先行研究と SFL の他動性の位置づけ	30
2.4.1. 連続体の概念	30
2.4.2. Lakoff の動作主－被動作主のプロトタイプ	31
2.4.3. Hopper and Thompson の他動性のプロトタイプ	32
2.4.4. 選択体系機能文法の観点から見る他動性－過程構成（Transitivity）の選択体系網－	33
2.4.4.1. 物質過程（Material Process）	34
2.4.4.2. 行動過程（Behavioral Process）	34

2.4.4.3. 心理過程 (Mental Process)	34
2.4.4.4. 発言過程 (Verbal Process)	34
2.4.4.5. 関係過程 (Relational Process)	35
2.4.4.6. 存在過程 (Existential Process)	35
2.5. 認知言語学と選択体系機能文法	37
3. アラビア語文法論における他動性	40
3.1. 動詞文の範囲	40
3.2. 動詞文の構文	41
3.2.1. 能動態	41
3.2.1.1. 能動文における動詞の形態	41
3.2.2. 受動態	43
3.2.2.1. 受動文の動詞の形態	43
3.3. Sibawaih の文の構成要素への見方	44
3.4. 情報選択	45
4. まとめ	47
第二章 物質過程	48
1. 能動的な物質過程	51
1.1. 対象が「を」格で具現される過程型	51
1.1.1. 「有生物」の行為者と「無生物」の対象	52
1.1.2. 「有生物」の行為者と対象	57
1.1.3. 後置詞「ب」による他動詞	58
1.2. 受益者を含む物質過程	59
1.3. 有害／悪影響を表す物質過程	60
1.4. 3項動詞文（二重目的語構文）	62
1.5. 結語	67
2. 受動的な物質過程	74
2.1. アラビア語の受動態－その伝統と新しい視点の必要性－	74
2.2. V(受身)－N「中核部－対象」の構文	75
2.3. V1（不完全）－NP-VP2 の構文	78
2.4. VP1－NP－VP2 の構文	83
2.5. NP1－NP2－VP の構文	84
2.6. VP－PP	84

.2.7 結語	85
3. Happening を表す過程	86
3.1. 結語	88
4. まとめ	89
第三章 発言過程・心理過程	91
1. 発言過程	92
1.1. 「فعل」による発言過程	94
1.2. その他の発言過程	100
1.3. 物質過程の対象と発言過程の発言内容の相違	104
1.4. 結語	104
2. 心理過程	107
1.1. 「أرى (見る)」によって実現される心理過程	107
1.2. その他の感覚者と現象からなる過程	110
1.3. 結語	111
3. まとめ	113
結論	115
研究の限界と今後の話題	119
参考資料	120
参考文献	120
アラビア語の参考文献	124

図表目次

表 1: Hopper and Thompson の他動性のプロトタイプ	33
表 2: (SFL における他動性—過程構成の選択体系網——過程構成とその参与者).....	36
表 3: 名詞文の構文	40
表 4: アラビア語の他動詞の種類 of 具体的例	43
表 5: 名詞文—品詞とテーマ・レーマの語順—	44
表 6: 動詞文—品詞類とテーマ・レーマの語順—	44
表 7: Happening represented by an ‘intransitive’ material clause (a) and doing represented by a ‘transitive’ material clause (b) _ (Halliday, Mathesien 2014: 226).....	50
表 8: 有生物の行為者と無生物の対象の物質過程の構造.....	55
表 9: アラビア語の過程における前置詞句による対象の具現.....	59
表 10: 無生物の行為者—有生物の対象の能動的物質過程.....	61
表 11: 三項動詞文の物質過程—受益者：受給者の意味役割.....	64
表 12: 三項動詞文の物質過程—受益者：受領者の意味役割.....	64
表 13: 「教える」による心理過程の構造	65
表 14: 「過程中核部—対象 (生じさせる—Creative)」の構造.....	68
表 15: 「過程中核部—行為者—対象(作用域)」の構造	69
表 16: 対象が行為者に先行する過程構造	70
表 17: 対象が行為者に後続する過程構造	70
表 18: 使役による対象の指摘	71
表 19: 前置詞句による対象の具現	71
表 20: 参考動詞文の過程構成の構造	72
表 21: V1 (不完全—NP-VP2 の構文におけるテーマ・レーマの具現と過程構成 (1) ..80	
表 23: V1 (不完全—NP-VP2 の構文におけるテーマ・レーマの具現と過程構成(2) ..80	
表 24: 例 5 の各日本語訳におけるテーマ・レーマと過程構成.....	82
表 25: 例 6 の各日本語訳におけるテーマ・レーマと過程構成.....	83
表 26: Say と Tell の過程の参与要素の相違	94
表 27: 例 1 ～ 3 の過程による Target の有無	95
表 28: 「قال (言う)」の基本的意味に「指摘」という意味を表す過程構成.....	97
表 29: 「قال (言う)」の基本的意味に「依頼・命令」という意味を表す過程構成...97	
表 30: 「قال (言う)」の基本的意味に「批評」という意味を表す過程構成.....	98
表 31: 「قال (言う)」による発言過程の意味役割と過程の参与要素	99
表 32: 「نبا」による発言過程の意味役割と過程の参与要素。	102
表 33: アラビア語と日本語における発言過程の意味役割と動詞の具現.....	106
表 34: 「رأى」による心理過程の意味役割.....	112

図 1: 翻訳学のマップ	13
図 2: Badaway によるアラビア語の言語層.....	20
図 3: (過程の種類と下位分類－Halliday 2004 によるもの)	37
図 4: 物質過程とその下位カテゴリー	51

序論

問題意識と論文の目的

翻訳の難易性や問題点には、各々のレベルがある。語彙の意味から始め、起点言語テキスト（Source Language）と目標言語（Target Language）の文構成の相違、テキスト全体の結束性など様々なレベルがある。また、詩のようなリズムが重視されるものの翻訳の場合、音韻システムの相違も問題となることが少なくない。

アラビアから日本語への翻訳を対象にした研究は今まで非常に少ないと言える。該当研究を通じて翻訳の問題点の分野への第一歩として、それらの問題点を明らかにするため、アラビア語と日本語の対照研究が必要不可欠である。

その点について、Walid（2018）はアラビア語母語話者の日本語学習者の翻訳授業で見られる文法的な困難さ取りあげ、両言語観の対照研究の必要性を重視した。また、Walid（2012）は語レベルとフレーズ（節）レベルの翻訳等を取り上げ、アラビア語と日本語の特徴を考慮した翻訳ストラテジーの必要性を強調した。それを達成するために、言語分析の対象研究、そして両言語を対象とする翻訳研究を多量に行わなければならないと言える。

本研究では、節のレベルとりわけ動詞節の対照研究を通じて、アラビア語と日本語の文構成のレベルの様々な等価の可能性を整理することを目的とする。

研究意義

- アラビア語と日本語の文法モデルの構築の第一歩となる。
- その文法モデルを構築することによって、信頼性のある翻訳ストラテジーに達成する可能性が高くなる。
- 宗教テキストも無論、文学テキストの翻訳ストラテジーの根本的な段階である。
- 本研究を通じて得られる結果は学習者はもとより、アラビア語から日本語への翻訳で活躍している翻訳者に役立つと考えられる。

研究方法

本稿では、アラビア語と日本語（ユースフ章とその三つ日本語訳）の動詞文（節）を選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics 以下、SFL）のアプローチに基づいて対照する。SFL を起点言語テキスト（source text:ST）と目標言語テキスト（target text:TT）の分析のツールとして応用する。アラビア語と日本語を言語システムとして比較、対照をし、その言語システムの相違から発生する翻訳の難易性や問題点を明確にする。Halliday により提唱された選択体系機能言語学（SFL）の枠組み

を用いて行うが、アラビア語と日本語の独自の方法論を常に念頭に入れ、分析を進めていく。

Halliday は英語のみではなく、中国語を始め様々な言語を分析の対象にした。Hallidayとその弟子は50年間にわたる長い時間をかけて、英語の体系を構築したが、それに対する同量の日本語の研究が行われていない。また、日本語の研究が少ないながらもある程度進んでいるのに対して、アラビア語の選択体系機能主義の枠内での言語構築の研究は非常に少ない。そのため、上で述べた通り、分析の際アラビア語と日本語のそれぞれの独自性にも焦点を当てる。これは、言うまでもなく、SFLの理論的枠組みを崩すものではなく、理論的な修正を加えようとするものでもない。言い換えれば、言語理論が言語分析に普遍的に適用されるものであっても、個別言語にはそれぞれの言語に適した分析方法が必要であるという観点から本論の考察を進めていくものである。

なお、論題には「意味論」と記載しているが、なぜ SFL を分析ツールとしたかを次に説明する。SFL の理論の基礎にあるのは、言語が意味を作り出す (meaning-making) ための体系であるという概念である。Halliday (1994 : xiv) はそれを出張し「Systemic theory is a theory of meaning, as a choice, by which a language or any other semiotic system is interpreted as networks of interlocking options」と述べている。また、SFL は語彙の意味だけではなく、文法の分析を可能にする理論である。動詞節において、主語、目的語、動詞を区別して分析しにくいのである。しかし、SFL の枠内で分析すると、動詞節を事象の経験として考え、全ての要素を同時に分析することが可能となる。

SFL による言語モデルは詳しく第一章で述べるが、研究の範囲を設定するためにここで簡単に概略する。SFL による言語モデルは 3 つの層に分かれる。それは、意味層、語彙文法層、音韻・書記層である。また、言語システムでは、意味層において、概念的機能 (Ideational function)、対人的機能 (Interpersonal function)、テキスト形成的機能 (Textual function) のメタ機能が存在する。それらの機能は独立するのではなく、常に重なり合い、意味を作り出す。その三つのメタ機能は語彙文法層に反映されるため、テキストが意味を成す。語彙文法層には、過程構成 (Transitivity)、叙法 (Mood)、主題 (Theme) などの選択体系網 (System network) が存在する。それらの選択体系網から選択される意味の仕方によって、具体的なテキストが発生する。

それぞれの選択体系網から様々な選択肢が可能である。自然言語の場合もそうであるし、翻訳の場合もそうである。つまり、翻訳者は翻訳という作業において、様々な可能の選択肢から選択しているわけである。一つの翻訳のみを分析しても、

言語のシステムとして一般化できる客観的な結果を得られると言えない。そのため、本論では、3つの日本語訳を分析対象として採用する。

テキストの起点言語（Source Language 以下、SL）から、目標言語（Target Language 以下、TL）への意味の転換を扱う翻訳研究においても、この言語の3つのメタ機能上の貢献に等しく注目すべきである。筆者は翻訳を分析するために、2つのメタ機能とコンテキストを視野に入れた考察を行う。それは、概念的機能とテキスト形成的機能である（対人的機能にも必要に応じて触れるが今回は対象外とする）。本論では、語彙文法レベルで分析を行う。従って、過程構成と主題を考察する。つまり、観念構成的メタ機能、つまり認知的意味に関する等価を論ずる。また、翻訳という過程を経たテキストはテキスト的メタ機能の等価をどのように達成できるのかをアラビア語と日本語の言語学的共通点と相違点から分析する。具体的には、ST と TT の過程構成、または、主題—題述構造や談話レベルでの主題の展開を中心として、それに影響を与える様々な言語的選択を考察の対象とする。

アラビア語の動詞文は動詞で始まるものに限定される。しかし、本論では、それのみではなく、文中条件文、名詞文の述語、発言内容に具現される全ての動詞節を対象とする。

先行研究

日本語とアラビア語の対照研究の特に動詞を対象にした研究には、Nayel (2016) の日本語とアラビア語における受身がある。その研究を通じて、筆者は両言語における受身の使用、および主語を隠す理由を明らかにした。

また、両言語間の翻訳の問題点には、一般的な翻訳の難易性と問題点を中心にした Alkuraidi (2015) の研究がある。Alkuraidi はそれに引き継いで、宗教、とりわけイスラーム教の分野の翻訳の基順を探った。また、Haggag (2017) はクルアーンの日本語訳を中心に、文体の選択に関する翻訳戦略を探った。

Halliday によって提唱された選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics）は様々な研究者によって研究され、それぞれの研究者が自らの母語の言語モデルの構築を試みた。日本語とアラビア語を対照する研究は見当たらないものの、それぞれの言語を対象にした研究が行われた。日本語の研究が数多く行われている一方、アラビア語の研究は非常に少なく、まだ初期段階にあると言える。ここでは順に日本語の先行研究、そしてアラビア語の先行研究を整理する。

日本語の研究は基本的に叙法の領域で行われ、日本語の独特な使役・受身・敬語を中心に研究に力が注がれた。その代表的な研究として Hori (1995) の対人的メタ機能をめぐるモダリティとポライトネスに関する研究が挙げられる。

2004年に Teruya は日本語の対人的メタ機能をコーパスに基づき、幅広く検討し、対人的機能の選択体系網の構築に近づいた。2007年にもまた新たなコーパスに基づき研究の範囲を拡張した。

龍城正明（2000、2004、2008）は選択体系機能言語学におけるテーマ・レーマの解釈を日本語に適応する際の日本語の特殊性を考察した。また、SFL 理論の枠組で日本語の過程型の特有の特徴を明らかにした。英語の過程型は文法範疇の動詞のみ分析されるのに対して、日本語の場合、従来形容詞として捉えられてきた品詞も動詞と同じ機能を持つことを証明した。

その次、SFL の教育への応用的な側面の研究が始まった。例として、佐野 (2010) の『選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法』が挙げられる。佐野は「修辞ユニット」を用いてテキストの専門性を捉える方法について概説し、特定目的のための作文指導にこの概念を活用する方法について説明した。また、翻訳教育への貢献の研究も進んだ。長沼（2005）の大学の翻訳教育における SFL の概念の適応の成果がその例である。

しかし、言うまでもなく、日本語の文法モデルの構築はまだ研究する余地が大きい。対人的メタ機能のみならず、概念的メタ機能とテキスト形成的メタ機能の研究が活用できる部分が多くある。

一方、アラビア語の SFL の研究は構造的に説明できるほどの進歩はしていない。しかしながら、Anany (2008) はアラビア語の選択体系機能理論の必要性を指摘し、特に翻訳研究の分野でいかに役立つかを主張した。また、Elabd (2005) は Halliday の理論に基づいて SFL は言語間の対照に最ふさわしい方向であると述べ、アラビア語に非常に適用しうる理論であるとも主張した。それに対して、Nahla (2009) は Halliday の理論について「アラビア語の特徴にも合い、アラビア語への適応の可能性が非常に高いものの、Halliday の理論は残念ながらアラブ世界で普及しなかった（著者訳）」と述べた。

以上の見解に基づき、選択体系機能言語の理論を分析のツールとして、アラビア語と日本語の動詞節の対照分析を行う際にふさわしい手段であると判断できる。従って、本論では、選択体系機能理論を基盤にし、両言語間の構成の相違点と類似点を考察する。その基礎的な対照により、翻訳過程における問題点や難易性を乗り越えるための戦略をより深く理解できる。その理解が、翻訳教育や文法指導の際に役立つことが期待される。

論文の構成

本論は序論、3つの章、結論から成り立つ。また、専門用語や資料の付録が最後にある。序論では、本研究の目的と必要性について述べ、分析方法と先行研究を述べる。

第一章では、本論で扱う全ての理論を概観し、本論での使い方と関連を明らかにする。第一章 1 節では、翻訳研究の言語的アプローチとその中で最も重視される価とシフトの概念を紹介する。次に、クルアーンの翻訳とその不可能性に関する議論とクルアーンの日本語訳を紹介し、本論で扱う翻訳とテキストの範囲を設定する。2 節では、本論で使用する分析ツールの選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics）の発展と理論概要をまとめる。そして、本論で中心的に扱う選択体系機能言語学の他動性の観点と他の理論の中での位置づけを明らかにする。3 節では、アラビア語の動詞文の構成と他動性の伝統的な観点をまとめる。

第二章では、アラビア語と日本語の物質過程を取り上げ、分析する。その分析の結果に基づき、両言語間の過程構成とその実現を対照する。また、翻訳のプロセスで起きたシフト、両言語間の等価を考察する。まず 1 節ではユースフ章に見られる **Doing** を表す能動態の物質過程とその各種を分析し、アラビア語の過程構成とそれに相当すると考えられる日本語の過程構成を考察する。過程の意味と参与要素の意味役割を明らかにする。2 節では、同様に **Doing** を表す受動的な物質過程を分析し、新旧情報に基づいて、過程の意味と参与要素の意味役割を明らかにする。最後に **Happening** を表す物質過程を取り上げ、分析する。結語では、両言語間の特殊性による相違点と共通点を明らかにする。

第三章では、心理過程と発言過程を取り上げる。1 節では、ユースフ章における各種の発言過程とその日本語訳を分析し、両言語における過程構成と参与要素の意味役割を考察する。同様に 2 節では、心理過程の例を分析し、過程の意味を明らかにする。

第一章 理論の背景

1. 翻訳研究の分類

翻訳学は翻訳に関わることを研究の対象にする学問である。翻訳は古代から文化、貿易、統治などの多くの分野で行われていた。どのように翻訳すべきかは哲学者や研究者は長い時間にわたり論じていたが、翻訳が学術研究の対象として独立した学問分野になったのは 20 世紀後半である。

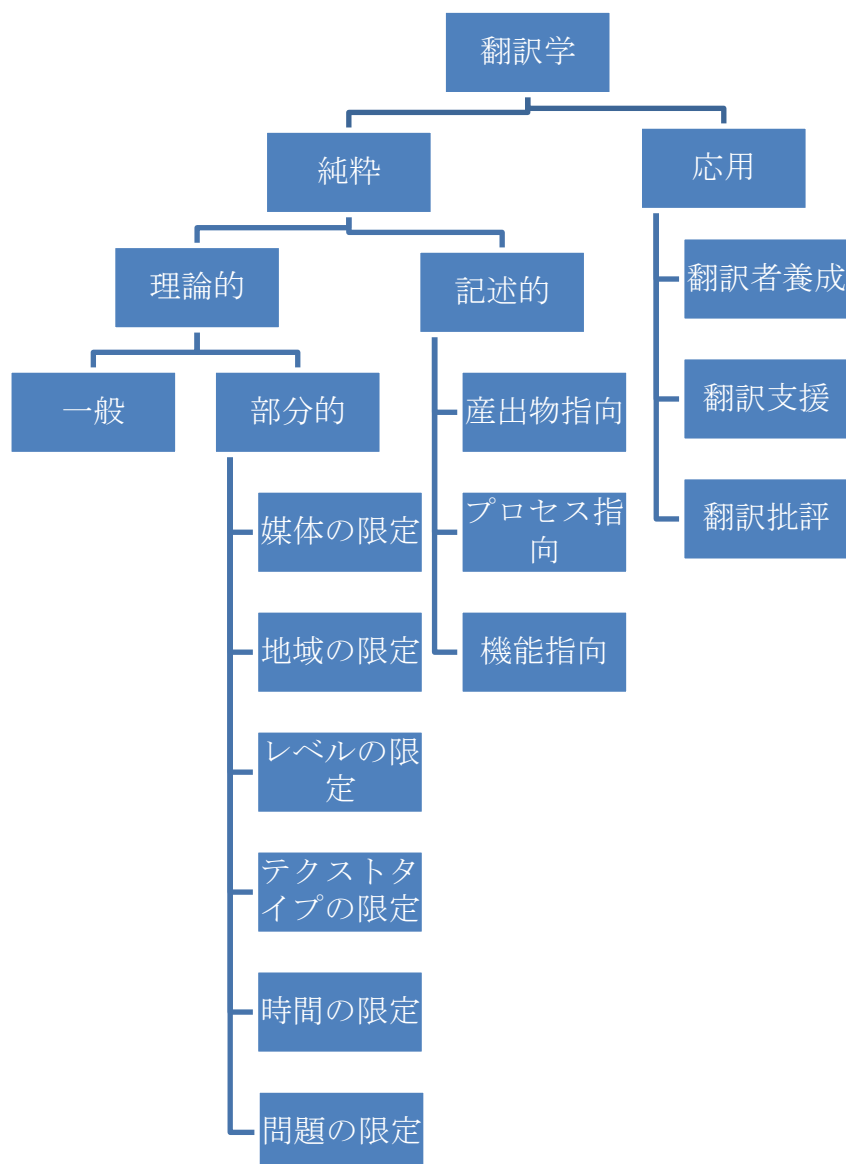


図 1: 翻訳学のマップ

翻訳学には「純粋研究」と「応用研究」という大まかな分類がある。純粋は基礎研究であり、応用は基礎研究に基づき翻訳に関わる実践的な問題に取り込む研究のことである。応用分野として、翻訳業務の支援（ツールや辞書など）、翻訳批評が挙げられる。一方、「純粋」はまず、「理論」と「記述」に分けられる。「記述」はトゥリーが中心になって発展させた「記述的翻訳研究」というアプローチを指す。

その内、1) 翻訳のテキストそのもの（産出物）product oriented DTS 2) 翻訳のプロセス、Process oriented DTS 3) 社会における翻訳の位置や翻訳の目的（機能）Function Oriented DTS というアプローチがある。いずれも研究対象について描写し、分析説明するという研究方法である。（武田 2015: 115）

「理論」は「一般」と「部分的」とに分けられている。「一般」は翻訳全般を対象にする理論であり、「部分的」は翻訳のある側面に焦点をおいた理論研究である。「部分的」はさらに「媒体の限定」（人による翻訳か機械による自動翻訳かなど、「地域の限定」（特定の言語や文化集団に焦点）、「レベルの限定」（単語や文章などの特定レベルに焦点）、テキストタイプの限定（文学、技術翻訳など特定のテキストタイプに焦点）、「時間の限定」（特定の時代や機関に焦点）、そして「問題の限定」（特定の論点や問題に焦点）に分類される。（同上）

翻訳理論には大きな変化が見られる。初期には起点テキストに基づき、理論を提起する研究が進み、その後、翻訳行為そのものをプロセスとして、また、翻訳のテキストそのもの（産出物＝目標言語に訳されたテキスト）に焦点が移動した。ここで特に取り上げることは翻訳研究の発展における言語的なアプローチである。

1.1. 翻訳研究の言語的アプローチ

翻訳研究の関心は主に起点テキストと目標テキストを比べ、その言語的特徴を分析することに向けられていた。翻訳研究における「言語学的アプローチ」という用語は、次の二つの概念を指摘して使われてきた。

- 1) 翻訳や通訳を主として言語的プロセスと捉え、主に言語学理論によって説明する理論モデル（Nida1964、Catford1965、House1977、Hatim and Mason 1990、Davidson 2002 など）
- 2) 翻訳や通訳の現象における特定の側面を説明するのに、言語学の知見や概念、方法を適宜応用するさまざまな研究。

そこでの最も重視された概念は「等価」と「シフト」である。それぞれの概念を以下で紹介する。

1.1.1. 翻訳等価

等価は翻訳の言語的アプローチの重要な概念である。起点言語から目標言語に翻訳を行う際、一語一語の対立は原則的に不可能である。しかし、二言語間の等しい価値を実現することは可能である。それを「等価」という。等価は簡単には規定できないことである。なぜなら、原文の表現や語句だけではなく、著者の意図や読者に発生する反応など各々のレベルがあるからである。

等価概念をどのように扱うかについて立場が大きく分かれている。Koller, Naida, Catford, Toury, Pym は等価関係をもとにして翻訳を定義しているのに対して、Snell-Hornby や Gentzler のように強く反対し有害だとしている研究者もいた。また、Baker は中立的な立場におり、理論的な価値も認めるが、それより翻訳者にとって馴染み深さが重要だとしている (Baker1992: 5-6)。それぞれの研究者による分類や見方は以下で取り上げる。

Koller (1979) は等価を指示的等価、暗示的等価、テキスト規範的等価、語用論的等価、形式的等価の 5 つに分類し、Baker (1992) は単語レベル、フレーズレベル、文法レベル、テキストレベル、語用論レベルの 5 つに分類した。また Pym (2010) は、このような言語レベルによる分類ではなく、二言語間の翻訳結果の可逆性・対称性の有無によって等価学説をメタレベルで自然的等価と方向的等価に分類している。以上が翻訳学と対照言語学の対比の大枠である。では、具体的な議論に入っていきたい。

等価はその概念自体、極めて多くの定義や特徴づけがなされており、争いがあるが (Pym 2010)、ひとまず、起点テキストと目標テキスト間の言語的・文化的価値が同じであると定義しておく。この等価には、語レベル、フレーズレベル、文法レベル、テキストレベル (主題進行・結束性)、語用論レベルの 5 つのレベルが想定でき (Baker 1992)、本稿では主に語彙レベルと文法レベルでの等価を扱う。また「シフト」とは起点言語と目標言語の構造上の差による、起点テキストと目標テキストの言語上のズレのことである (Catford 1965)。これに関連して「転換操作」とは、翻訳シフトを実現するためのさまざまな操作のことで、言語構造上、義務的にシフトさせる必要がある義務的なものと、目標言語らしさを獲得するためや一定の文体的効果を狙うためにおこなう選択的なものがある (Vinay & Darbelnet 1958; 河原 2010)。

今まで明らかになったとおり、等価概念は翻訳研究の言語学的なアプローチと結びつけられた。しかし、それらの研究が 1980 年代から 90 年代までに、翻訳研究の独立に伴い、変わってきた。翻訳研究が文化的アプローチ、社会学・ナラティブ・人類学など幅広い研究範囲に関わってきた。

さまざまな分野から取り入れたモデルや概念の中でも、言語学は翻訳研究に寄与した。現代でも翻訳者養成の教材として最も使用されているとされる Baker の *Other words* は選択体系機能言語学に基づいたものである。

ここまで、翻訳研究の規範と発展、又は言語学的アプローチとそれにおける等価の概念を紹介した。次にもう一つの重要な概念「シフト」を取り上げる。